

先生が野中式事例検討を 広めた切実な想い

執筆 ▶ 島村 聡 ● 沖縄大学福祉文化学科准教授



出会い

当時私は、那覇市役所の障害者担当という立場でありました。障害者ケアマネジメントの試行的事業を実施したことがきっかけで、1998年に身体障害者版のテキストを執筆することになり、この世界に入ってきました。野中猛先生との出会いはこのころであったと記憶しています。精神科医であり、精神障害者のケアマネジメントに精通されていた野中猛先生は、障害者ケアマネジャー（現在は相談支援専門員）の養成に尽力されていました。

この試行的事業では、24人の障害者ケアマネジャー（いずれも社会福祉士）が市内の24人の利用者宅を訪問し、一人ひとりのアセスメントを丁寧にとり、ケアプランを立て、必要な社会資源をつくるまでやりきることを目的にしました。たったの9カ月ほどでその成果を出すという無茶なスケジュールにもかかわらず、参加したメンバーはいずれも嬉々として取り組んで成果をあげたのです。いうまでもなく、それまでの「措置」では、障害者の想いを実現するための最大の壁は、絶対的な行政サービスの量的質的不足でしたが、ケアマネジメントではニーズがある限り、社会資源はつくられることが原則ですから、メンバーたちはソーシャルワーカーの意地にかけて資源をつくらうとあちらこちらの関係者に働きかけを行ったのです。

野中先生は、そんな我々の取り組みを聞いて、「結構まともにやってんだ。おもしろいねえ」とうれしそうにされていました。一方、先生曰く「行政だったらこれをシステムにしなきゃなあ」と厳しいご意見をいただきました。それもあって

か、結果的に私は、住宅改造費助成や24時間型のヘルパー派遣の制度化を行いました。先生との出会いはのっけから刺激的なものでした。

「介護保険専門員」を批判

ケアマネさんへ

私の話を聴いて下さい
私を囲わないで下さい
でも私を見放さないで下さい
私は私の人生を大切にしたいのです。

私の願いを聞いて下さい
私をごまかさなさい
できないときは他の方につないで下さい
私は私の人生を諦めたくないのです。

私の姿を見せて下さい
私の可能性を教えてください
でも押しつけないで待って下さい
私は私の人生を自分で生きたいのです。

これは、野中先生が2005年度の障害者の相談支援従事者指導者研修における演習コメントに換えて、スライドと

して映し出されたものです。この痛烈なメッセージに、先生が示したかったすべてのことがあると考えています。先生が、2000年に始まった介護保険制度や介護支援専門員について「介護保険専門員」とあからさまに批判をされていたことは有名ですが、ケアマネジメントを純粋な社会福祉援助技術として日本に根づかせたいという情熱に水を差されたことへの無念さは、とても大きかったのだと思います。

実は、先生ご自身、ケアマネジメントという技術の存在に気づかれたのは自ら支援を行っている精神障害者のためにチームケアを行っているときだと話されています。ご自身に取り組んでいたことが既にイギリスでケアマネジメントとして形になっていたことから懸命に学ばれ、それを日本に広めようとしたときに、公的なサービスの調整に限定されがちな仲介型（ブローカーモデル）の「介護保険専門員」が生まれてしまったという悔しさが、一層ケアマネジャー教育へ走らせたのではないかと私は考えています。

「分野を越えたい」という想い

先生はケアマネジメントを、高齢者や障害者といった枠を越えた普遍的な技術として普及させたいという願いをお持ちでした。しかしかつては、障害者の世界ですら、身体、知的、精神の分野別のケアマネジメントが検討されていました。私は、先の沖縄の取り組みを報告した際も「沖縄が突破口になればねえ」と期待を口にされました。先生は、障害を越えて支援者同士がつながっている沖縄の関係性の良さをご存知だったのです。

なぜ、三障害が同じ原理で進めないのかという想い（怒りと言った方が適切かもしれない）が先生にあったのでしょうか。詳しくは言えませんが、国レベルでは三つの分野にはそれぞれ主張し合うものがあり、お互いの違いを強調しすぎていました。沖縄は全国に先んじて三障害が一つになってケアマネジメント研修を行ってきましたが、その原動力は、先生の「怒り」とそれを形にされた精神保健福祉士会の会長であった先生の盟友、門屋充郎先生の後押しが大きかったと感じています。

想いの聴けないケアマネは要らない

野中先生とは、毎年の障害者ケアマネジャー指導者養成研修の企画で一緒することになりました。特に印象深いのは2005年の、三障害を一つにまとめた障害者自立支援法が公布された年です。多くの職種が研修受講により相談支援専門員となれることから、受講者の熟達度に大きな格差が生じるなど混乱が起き始めており、先生も気合を入れてお話をされていました。

そのとき先生は、先に掲げたケアマネさんへの詩を掲げ、「三障害の分野を越え、職種も越え、幅広い人材がケアマネジメントにかかわることは決して悪いことではない。しかし、誰のための何のためのケアマネジャーなのか、制度依存的な仲介人は不要である」と、いつになく強い口調で述べられました。想いの聴けない、想いの実現に真摯でないケアマネさんはさようなら、という強烈なメッセージでした。

「そうだなあ。やはり想いだ」と意気を感じた私はすぐに、ご一緒した駒澤大学の佐藤光正先生のお力を借りて、想いのマップというツールを作ったのですが、今思えば、このときのメッセージが私に行動を起こさせたのではないかと感じています。

野中式事例検討を進めた信念

前に生まれん者は後を導き、
後に生まれん者は前を訪え

これは、先生が私に託してくれたスーパービジョン（SV）の説明ファイルの先頭に記してある親鸞上人の言葉です。先生の教育の信念とも言えるでしょう。

先生がケアマネジメントのプロセスで最も重視していたものは、文句なく「ケア会議」でした。それは「ケア会議のできないケアマネは手術のできない外科医だ」と言い放つほど強いもので、主に二つの理由がありました。一つは見立ての技術を磨くことで、支援の質を向上させること、もう